

数論の魅力に惹かれて

広中由美子（早稲田大学教授（教育・総合科学術院数学教室））

仕事の内容

数学科に所属する教員として数学科の学生への専門教育と、自分自身の研究がメインの仕事である。なかなか、研究と教育が結びつかないのが残念なところである。また、事務的・運営的な仕事も当然あり、避けては通れない。

進路決定まで

「大きくなったら何になるか、何を専門とするか」については子供の頃からいろいろ興味をもち、夢想もし、考えもした。高校2年くらいからは、数学と物理にしばられ、結局、数学を専攻した。数学の中では、代数的なことに興味をもった。抽象的な論理の世界を美しいと思い、解析系統より代数系統に惹かれ、数論を専門とし、現在に至っている。

就職・その後

理系の学科・大学院などが拡充され、少し上の世代の方々が席が占められた後に、就職戦線にいた年まわりであり、女性差別とあいまって、なかなか決まらなかった。大学の非常勤講師すら、女性だという理由で相手にされず、高校の非常勤講師などもした。今は、大学の非常勤について、女性だからと断られることは少ないようで、その点は前進していると思う。

そういう中、信州大学の理学部数学教室に助手として採用されたことは非常に幸運だったと思う。すでにパートナーがいたので、単身赴任であった。それぞれが、週日には自分のペースで勉強や仕事ができることは単身赴任の利点である。また、地方の大学で職場と住居が近いのも便利であった。信州大学には16年いた、その間、ドイツ・ゲッティン

ゲン大学に客員教授として招かれて一年滞在し、また文科省の国内研修の制度で、約一年立教大に滞在することもできた。その後、文科省の短期派遣として半年、ドイツの大学に滞在する機会を得たりしたので、ずっと松本にいたわけではなかったが、東京にもどりたいという思いは募り、'98年に早稲田大学に転職のチャンスを得た。

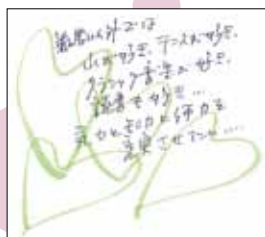
進路選択に対してのメッセージ

自分のやりたいことをみつけて、それに向けて努力することに尽きると思う。一方、余りに早くに絞り過ぎないよう視野を広げておくことを勧める。



<広中由美子（ひろなかゆみこ）プロフィール>

お茶の水女子大学大学院数学専攻（修士課程）、筑波大学大学院博士課程数学専攻（単位取得退学）を経て、1982年3月信州大学理学部に助手として就職、1992年より助教授、1998年4月より現職。



海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

自分の分野に近い海外の研究者と直接の知己を得たこと。研究を進める上で有益である。その後も内外で開かれる国際研究集会で交流しつづけている。そういう中でいくらかは語学能力を上昇させることもできた。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

- ・ドイツ連邦共和国が特別研究領域（SFB）という研究組織をいくつかの大学に設置していて、その客員教授として招聘された（ドイツ・ゲッティンゲン、一年）。
- ・文部省による「新しい科学技術の調査・研究のための海外派遣」の予算が（多分1996年度だけ）あり、それに応募して6ヶ月の海外派遣が認められた（ドイツ・マンハイム及びハイデルベルク）。
- ・早稲田大学の特別研究期間制度を利用して一年間在外研究をした（フランス・ストラスブール、ドイツ・マンハイム）。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

以下はドイツとフランスの数学研究者の事情で、いずれも国立（州立）研究機関に属することが殆どである。ドイツの大学では、少数の教授と任期付き助手・研究員で構成されている。女性にとっては、ギムナジウムまでが昼過ぎには終わる教育環境でもあり、職を得るための競争に勝ち抜くのは非常に難しく、教授は日本と同程度にごく少数である。フランスでは、研究者は研究を任務とする職種（CNRS）、大学で教えて研究する教員（教授・准教授に相当）の2種類に大きく分かれるが、いずれも国家資格であり、基本的に任期無しの職で、論文を提出して昇格を求めるシステムである。3分の1程度の女性教員がいる。

滞在先の思い出・生活者としての体験

私が滞在した大学（研究機関）では、訪問研究者が訪れることは日常的であり、研究室も与えられた。入学試験は基本的になく、学費も無料がごくわずか、勉強したいと思ってくる学生を相手にするというスタンスでの教育が成り立っていた。また教員の事務的な義務が少なく、社会全体に時間外労働も少ないので、十分な研究時間がとれ、ゆとりのある生活が送れる。



Strasbourg の高等数学研究所